

ステイホーム雑感

2020/8/24 三浦 幸廣

雑感(その1)

ここだけの話、最近のテレビ・新聞では「異常」を伝える言葉が飛び交っており、「地球はもはや平時ではない。非常時なのだ」という警鐘まで流れている。

例えば7月。「線状降水帯、記録的豪雨、記録的大雨被害、最大級警戒、想定超えた氾濫、激甚災害」などが入り乱れた。

そして8月。「猛烈な暑さ、危険な暑さ、災害級猛暑、猛暑列島、猛暑・コロナ禍の熱中症、酷暑続くコロナ盆休み」などが満ち溢れた。

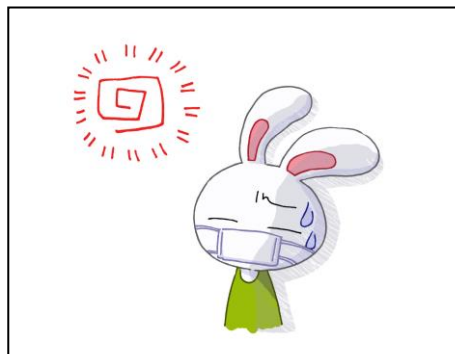
見過ごしてならないのはこうした災害の度に多くの人命が失われることで、なおかつ失われた命の大半が「高齢者つまり我々」だという事だ。「危険な暑さ」を例にとると8月1～17日まで間に熱中症で死亡した方は都内で103人。このうち屋内で97人が死亡しており、その3割強が夜間だったという。エアコンをつけないまま寝入ってしまったり、タイマーをかけて寝たもののタイマーが切れた後に室温がドンドン上り死亡するケースだという。繰り返したくはないけれど、ここでも死亡者の多くは「高齢者つまり我々」なのだ。

「自宅2階のベッドにもたれ掛かるようにして倒れているのが見つかり、その後、死亡が確認された。エアコンはあったが使っておらず窓も閉まっていた。別の部屋で寝ていた妻が朝、異変に気付いた」。このような記事を読むと背筋がゾーっとする。

昔から夏は暑いものと決まっていたが、ここ数年の暑さは桁が違う。その理由について気象予報士・お天気キャスターの森田正光さんは「人間が対処できないほど気象が極端になってきている」と指摘する。「自然は本来、バランスを求め、常に“中間・真ん中”へ向

かおうとする」ものなのに「夏が極端に暑くなったり、反対に冷夏になったりするということは、人間の活動によって崩された自然のバランスを自然自身が元に戻そうとする働き」なのだと解く。自然のバランスなどお構いなしに自らの欲求のままに振る舞ってきた人間の行為が招いた結果、つまり自業自得と言われているのだろう。

コロナだって同じ理屈だという。コロナのウイルスは元々コウモリが持っていたものらしい。コウモリはそのウイルスを持ちながらも暗い洞窟の中で、何十年も何百年もバランスよく暮らしてきたはずだ。しかし、そのコウモリを珍味として楽しむためか、はたまた漢方薬として売りさばき巨万の富を手にしようとしたためか、その洞窟にまで入り込み自然のバランスを崩してしまったのもこれまた人間だという。反省して寝る。



雑感(その2)

ここだけの話、雨はもう要らないと叫びたくなる。繰り返される豪雨のニュースで心が苦しくなる。そんな中、尾畠春夫さんが大分県の温泉街でドロ掻き出しのボランティアをしているという。新聞記事で知った。

尾畠春夫さんといえば3年前の9月、山口県の山の中で行方不明になった2歳の子をアッという間に発見した赤いハチマキのあの人だ。私より10歳ほど年長だから80歳は超えているはずだ。その尾畠さんが大切にしている言葉は「掛けた情けは水に流せ、受けた情けは石に刻め」だという。

3年前、人間学園で勉強していた頃、尾畑さんのこの言葉に感銘し小学校でボランティアを開始した。内容は英語の授業に参加し、学習支援することで、今でも週4日小学校に通っている。

小学校では今年4月から英語が正式科目となった。正式科目となったのは3～6年生だが、学校によっては2年生から体験学習という形でA、B、Cを教えているところもある。ひらがな、カタカナさへ怪しげな子供たちが「ハワユ～？」などと声を揃えて学ぶ光景には微笑ましいものがある。

英語を教えるのは担任の先生と英語専科教員(英語専門の先生)、そしてALT(外国語指導助手)の3人である。しかし教室で待ち構えるのは天下無敵の小学生。英語、日本語の区別もつかないまま英語の勉強をするのだから、それはそれは凄まじいものがある。市の公開講座でそうした事情を知って、ボランティアを申し出たことから学習支援活動が始まった。エネルギーに満ち溢れる子供たちに付き合うためにはこちらも相当なパワーが必要となる。しかし英語を通じて子供と接することは、なんとも言えない充実感となんとも優

しい幸福感を与えてくれる。

尾畑さんは「ボランティアは恩返し。人のお役に立ちたいから」とも語っている。現役時代の我が身を振り返ると、地域や学校の事は全て家内まかせ。子どもの担任先生の名前も知らなかった。先日、職員室でベテランの先生とお話をしている際に、その先生がかつては次男の担任であったことを知り慌てたこともあった。

今、英語学習ボランティアとして学校の授業に参加することは遅蒔きながら尾畑さん流生き方の自己実践版と考えている。反省して寝る。



雑感(その3)

ここだけの話、先の大戦で入間市にも爆弾が投下されたという話を聞いたことがある。その真否を確かめたくて入間市立博物館の特別展に行ってきた。

爆弾投下の話は数年前、傾聴ボランティア市民研修の一環としてディ・ケア・センターを訪れた際に偶然聞いた。そこに来ていた男性が語り出し、落ちた場所は現在のユナイテッド・シネマの周辺だとも語っていた。しかしその方の話は断片的で記憶も曖昧な印象をうけたためか忘れかけていた。だが「特別展」は、その男性の話の全てが真実だったことを証明してくれた。

「特別展」の説明板には昭和20年5月25日、B29爆撃機が1機、狭山方面から来襲し豊岡、黒須に大量の焼夷弾を投下したとあった。この爆撃で80戸が焼失し13名が死亡したとも。

75年前の5月25日といえば「山の手空襲」があった日だ。5月25日の夜、渋谷・青山の上空に飛来した502機のB29が絨毯爆撃をしかけ3,651人を殺戮した日だ。「表参道ではケヤキが燃え、青山通りの交差点付近では火と熱風で逃げ場を失った多くの人々が亡くなった」という公式な記録もある。入間市に焼夷弾を投下したのは、この502機の中の1機であると「特別展」は説明していた。

鎌倉時代から始まったという狭山茶の歴史は長く、その品質の高さは茶摘み歌で「色は静岡、香りは宇治よ、味は狭山でとどめさす」とまで歌われたと入間学園で学んだ。しかし昭和9年、この「茶の都」がアッという間に「軍都」に豹変したことは知らなかった。所沢には陸軍飛行学校があり、稲荷山には陸軍航空士官学校があった。そして現在の「武蔵工業団地」の一帯は陸軍飛行学校分飛行場・狭山陸軍飛行場があったという。博物館アリッ

トが建っているあの場所もその一角であったという。こうした軍の施設で訓練を受けた士官候補生が戦場に赴き帰らぬ人となったのだ。会場に展示されている「千人針」や「日の丸」の小旗を見た時、胸が一杯になった。

新聞によると昨今の若者の約20%は「真珠湾」という言葉が指す史実も知らなければ「8月15日」という特別な日の重みも知らないという。「日本社会のあり方が問われている」といのは、こういう現実を指すのであろうか。反省して寝る。



昭和13年 陸軍航空士官学校（当時は入間郡豊岡町）

(from https://www.mod.go.jp/asdf/iruma/second/iruma_air_base_history/index.html)

雑感(その4)

ここだけの話、8月15日が近づくと、なぜか津村節子の『星祭りの町』が読みたくなる。津村節子は作家・吉村昭の妻で戦時中、埼玉県入間川町に疎開してきた。その時の自身の体験を描いている。

玉音放送に続いて8月30日には連合軍最高司令官ダグラス・マッカーサーが厚木飛行場に降り立つ。その数日後通達が出され「豊岡の航空士官学校には9月14日、2,800人の米軍が進駐する」と地元でも流れた。入間川の人々は、米軍が空から落下傘で飛行場におりるのか、戦車や装甲車を連ねて入間川に侵攻してくるのかと怯えていたという。

米軍第1陣の800人は9月14日午前7時にトラック、乗用車に分乗して進駐してきた。到着後車から降りてきた兵隊たちはビールの栓をあけジャムつきビスケットを片手に、ピクニックのひとときといった様子だったらしい。続いての2～3日間、兵隊は入間川の町に現れなかったため男たちは一人二人と町に出始めた。だが女たちはまだ家の中に身を潜め雨戸の隙間から表を窺っていたらしい。

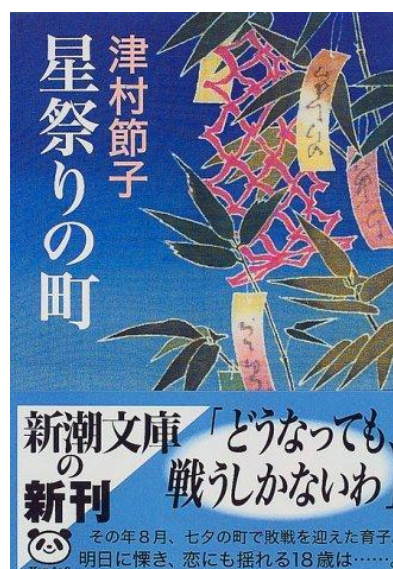
埼玉に先立って進駐軍を迎えた神奈川、千葉では米軍の乱暴狼藉に関する大変なデマが飛び交い、回覧板では「特に婦女子は質素な服装(モンペ)をし、家の内外を問わず素肌を露出しないこと」など8項目の嚴重注意を特記し、埼玉新聞は神奈川、千葉の状況を語る証言として「若い娘さんが乳バンドもせずに薄い着物であるのはいけないと思います」など、今読むと吹き出しそうな経験談まで掲載したという。

豊岡陸軍航空士官学校が「陸軍ジョンソン飛行基地」と変わり、ジープに乗る米兵を入間川の人々が毎日のようにみかけるようになった9月末、役場から突如「窓という窓はすべて開け放ち、押入れの戸も取り外して、布団も窓近くにひろげておくように」との指示があっ

たという。指示にしたがって家々は戸を全て開け放っていると上空にヘリコプターが低空飛行で飛んできて旋回を開始した。ヘリコプターは屋根すれすれに飛んできたかと思うと白い粉末を撒き散らし始めたという。「その濃密さはむせるほどであった」と小説にある。DDT の散布である。「そしてその夜から、軀を這う風の感触は無くなり、風の痒みを搔く人の姿も見られなくなった。その強力な効果に、私はまた打ちのめされたようになり、無力感を味わった」と主人公は記している。

『星祭りの町』のあとがきには「七夕通りを、ジープが走り、いずこからともなく集まってきた女たちが米兵の腕にぶら下がって、これ見よがしにロングスカートを翻して歩くようになった。私は十八歳だったが、共に日の丸の鉢巻きをしめてお国のために戦ってきた同年齢の娘たちであった」とも書かれている。

自宅から稲荷山公園駅前のサピオ・プールに向かう途中に航空自衛隊入間基地がある。8月15日はプールに向かいながら『星祭りの町』を思い出していた。反省して寝る。



雑感(その5)

ここだけの話、衆院議員が汚職事件で再び逮捕されたという。逮捕の理由が統合型リゾート(IR)法案を巡る汚職だというから泣きたくなる。それでなくても、コロナだ猛暑だと死ぬほど辛い夏だというのに。いい加減にしろと怒鳴りたくなる。

統合型リゾート法案の中身が今一つよく分からない。調べてみると日本国内にラスベガスのようなバカでかいギャンブル施設を創る構想のようだ。だがギャンブル施設ということもあって反対も強いらしい。

そこでお聞きしたいはギャンブルのどこが悪いのか、という疑問だ。私が子どもの頃は正月になると家族挙げて花札に夢中になった。大人も子供もお年玉を掛けて「花見で一杯、猪鹿蝶。赤タン、青タン、カス10枚」などと楽しんだものだ。少額ながらも現金掛けでやったのだから立派なギャンブルだが、警察に踏み込まれた経験は一度も無い。それどころか手札に描かれた花鳥風月は実に風情があったしタメにもなった。あの絵柄のお蔭で松、梅、桜、藤、菖蒲など1年12カ月の季語をいつの間にか覚えたとし、高校に入って古文を学ぼうえでも大いに役立った。

昭和の頃、会社の周辺には決まって麻雀屋があり、盛んに賭け麻雀が行われていた。サラリーマンの一種のタシナミという雰囲気さへあった。この種のギャンブル文化を踏襲したのが東京高検の検事長サマだ。ギャンブル文化の踏襲に夢中になり、つついコロナ自粛のタイミングを忘れてしまったのだろう。何ともチョンボな検事長サマだ。

競馬だって同じだ。競馬には天皇賞という最も権威あるレースが年に2回もある。天皇皇后両陛下も観戦されるし昭和61年には英国のエジンバラ公フィリップ殿下も一緒に観覧されたというが、ここに司直の手が入ったなどという話は一度も聞いたことがない。

世の中には常に精錬潔白な方がいて、ギャンブルと聞いただけで目くじらを立てるらしい。統合型リゾート法案についても反対派は「地域経済を衰退させ、ギャンブル依存症を増やし、自治体の負担を増やす。ギャンブルは高齢者の老後資金を吸い上げるのが目的だ」などと批判しているという。笑止千万、かたわら痛し、と言いたくなる。

この種の方々の説得はあまりにも空しいから統合型リゾート法案は諦めて、替わりに「ブックメーカー」導入法案を検討してはどうだろうか？ これは国が胴元となって開帳する「ノミ行為」のことで英国の「ブックメーカー」は特に有名だ。競馬から始まってプロスポーツはもちろんのこと、最近では選挙結果や戦争の勝ち負けまで賭けの対象にするという。現在の日本で「ノミ行為」はもちろん違法だがこれが公認となった暁には「不倫で次に炎上する有名人は誰か」とか「次の総選挙で自民党は勝つか負けるか」まで賭けの対象となるだろう。当たれば懸賞金が手に入るのだから国民の選挙への関心も高まるだろう。こんな良い事は無いと思う。

コロナを機に社会の変化を提言する声がある。大賛成だ。その要変換事項の1番先頭に「日本人全体がもっともっと大人になること」を書き込んでもらいたい。反省して寝る。



ブックメーカーの始まりはイギリスから

(from <https://www.cogflower.com/england.html>)